幕末明治 福井150年博
ニッポンの夜明けは福井から

発掘！明治を拓いた意外な福井藩士たち

2018年（平成30）
8月24日|金| → 10月24日|水|
福井県文書館閲覧室
開館時間 9:00～17:00
入館無料

展示パンフレット

平成30年度福井県文書館企画展示パンフレット

平成30年8月24日発行 編集・発行/福井県文書館
福井県文書館 〒918-8113 福井市下馬町51-11
TEL 0776-33-8890 FAX 0776-33-8891
E-mail bunshokan@pref.fukui.lg.jp

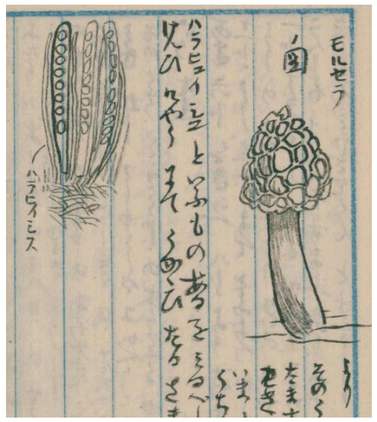
1 植物病理学研究の先駆者 白井（しらい） 光太郎（みつたろう）

白井光太郎は、明治から昭和にかけて日本における菌学を樹立し、本草学史研究の道を拓いた植物学者です。

松平慶永の近習だった白井久人の子として江戸霊岸島に生まれました。一説には名付け親は慶永だったともいわれます。維新後に一家で帰福するもすぐに上京し、再び慶永の側近として仕えています。慶永は自ら**英語を教えたり、習字の手本を書きあたえる**など幼い光太郎に目をかけていたようです。

1886 年（明治 19）帝国大学理科大学植物学科卒業、その年に東京農林学校助教授（翌年教授）、99 年（明治 32）から 2 年間ドイツに留学し、1907 年（明治 40）から 25 年（大正 14）にかけて**東京帝国大学農科大学教授**を務めています。この間、植物学や植物病理学の講座を担当し、農作物の病菌の調査を精力的に行いました。

白井光太郎（1863-1932）
（東京大学植物病理学研究室蔵）



「めいぢ十七ねんにつき」

学生時代の白井の日記です。植物学と同時に絵を描くことも好きだった白井は、日記や採集記録に巧みな挿絵を描いています。またこの資料には同じ福井出身者として交流のあった佐々木忠次郎や坪井正五郎についての記述も見られます。

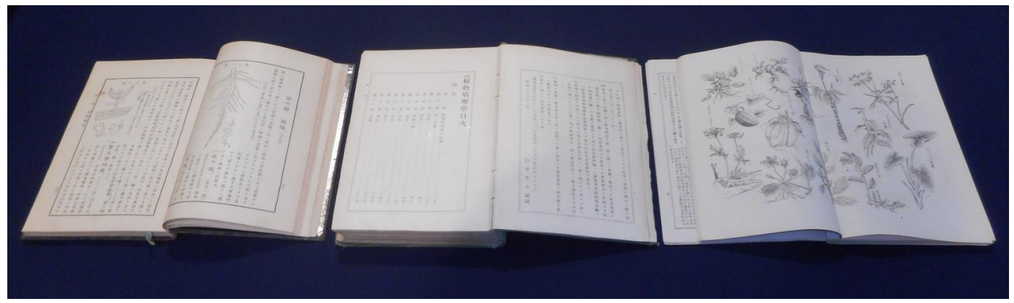
（国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

藩士たちの足跡

白井 久人（光太郎の父）の履歴

年未詳「士族七（シ、ヒ、モ、セ、ス）」

松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00490



白井の著作『中等植物学教科書』（左）、『最近植物病理学』（中）、『救荒植物』（右）

白井光太郎の著作の数々です。彼が松平試農場の評議員を務めていた縁から同所に寄贈され、現在の坂井高等学校に受け継がれています。『中等植物学教科書』は一般書として『最近植物病理学』は専門書として高い評価を受け、その後の植物学教育の模範となりました。

『救荒植物』は、飢えをしのげる山野自生の植物の収録を目的としたもので、1716 年（享保 1）刊行の同名の和書を翻案、再編したものです。このような本草学を中心とした古典の調査及び収集も彼のライフワークとなり、その成果は『日本博物学年表』にまとめられ多くの研究者の指針となりました。

1903 年（明治 36）『最近植物病理学』、『中等植物学教科書』、『救荒植物』（福井県立坂井高等学校蔵）

2 むかし武術家いま酪農家 団野（だんの） 確爾（かくじ）

代々福井藩の柔術師範を務める団野家に養子入りした確爾は、はじめ番士として藩に雇われ、ついで隊士として諸隊に配属され、天狗党の乱や会津戦争にも従軍しました。

その後、1869 年（明治 2）12 月に「柔術世話役頭取」となりますが、翌 70 年 2 月に「土着開墾」と「一万五千坪」の譲渡を願い出て許可され、帰農します。ただ、この時は完全に帰農しておらず、部隊に所属し、また由利公正の随員として東京に出張するなど、続けて藩士の職務にも従事しました。

団野確爾（1847-没年未詳）
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

腕が鳴るわい！

確爾（63 歳）は 1909 年（明治 42）の皇太子（のちの大正天皇）行啓時に御前で組み打ちの型を披露しています（左が確爾、右は酪農・畜産でも交流のあった岡研磨）。
（『福井の百年』1962 年より転載）

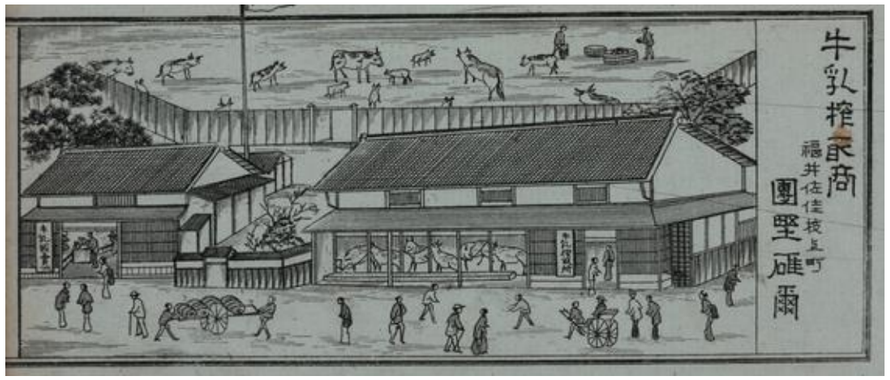
寛永（1624～45）の頃、山城国（現在の京都府南部）で夜盗の集団に襲撃されるも、供と 2 人で立ち向かい、8 人を討ち留めて 1 人を召し捕らえた修行中の若者がいました。その若者の名は市橋軍兵衛、確爾のご先祖です。

そんな半農半士の確爾が酪農家に。転機は同年閏 10 月の東京への出張でした。もとはといえば公正の随員でしたが、確爾は築地の牛馬会社や横浜在住の英国人から搾乳・製乳を学び、洋牛を購入して戻ってきたのです。こうして、福井の地で、乳牛の飼育と牛乳の販売がはじまりました。

当時は牛乳が浸透していなかったため、事業は失敗に終わりますが、確爾は事業の再興を図り、それが交同社（福井藩の士族が設立した活版印刷・牛乳販売の会社）の基礎となりました。

藩士たちの足跡

団野 確爾の履歴
年未詳「子弟輩　八（イハニホトチヲワカヨタツ子ナムウ）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-01095

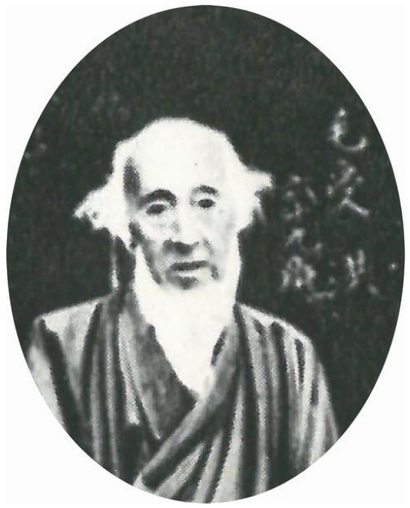


牛乳搾取商　団野確爾

団野確爾の牛乳搾取所（右）・販売所（左）は 1887 年（明治 20）に刊行された『福井県下商工便覧』にも掲載されています。

1887 年（明治 20）『福井県下商工便覧』（福井県立歴史博物館蔵）

3 由利・中根と並ぶ明治新政府参与 毛受（めんじゅ） 洪（ひろし）



毛受洪（1825-1900）
（『福井の百年』1962 年より転載）

毛受洪は福井藩士毛受福高の長男として生まれました。通称は鹿之介・将監です。

洪は松平慶永から高く評価され、1855 年（安政 2）に藩校明道館教授、次いで外塾師取扱、他国学問修行取扱などを歴任しました。そして、慶永の命を受け、京都における他藩との折衝や情報収集を担当しました。

1867 年（慶応 3）には中根雪江や由利公正らと共に新政府の参与に就任しました。

毛受洪、参与になる

資料は毛受洪を新政府の参与に任じる任命状です。

参与とは明治時代初期の役職名で、1867 年（慶応 3）に新設された三職（総裁・議定・参与）の一つです。廷臣（朝廷に仕える者）や徴士（諸藩士）により構成されていました。

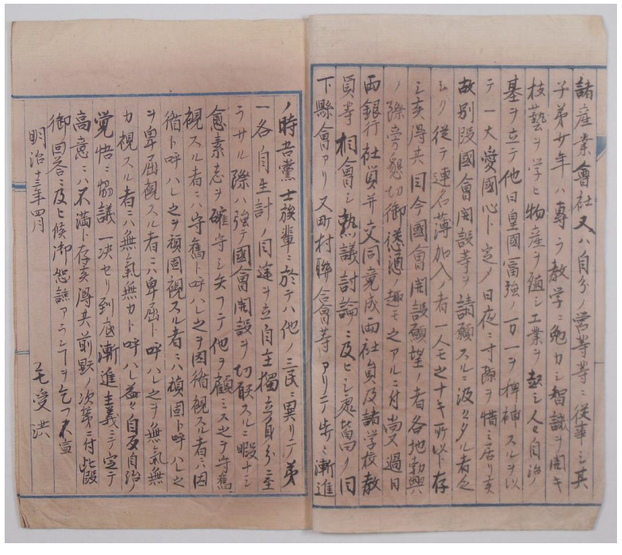
同じ参与でも廷臣出身の者は上の参与、徴士出身の者は下の参与と呼ばれていました。

（福井市立郷土歴史博物館蔵）

洪はその後福井藩権大参事や集議院幹事、竟成社（貸金業）社長などを務め、晩年は福井藩や主家である越前松平氏の歴史編さんを行いました。

毛受 洪の履歴

年未詳「士族六（サ、キ、ユ、メ、ミ）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00489



1880 年（明治 13）4 月　「（強テ国会開設願望を切願スル暇ナシ、毛受洪他書状等写）」
矢尾真雄家文書（当館蔵）C0065-00165

運動に参加する余裕はない

資料は毛受洪ら 4 名の旧福井藩士達から杉田仙十郎（杉田定一の父）に宛てられた書状を写したものです。

1880 年（明治 13）、国会期成同盟が結成され、国会開設請願運動が盛んになりました。当時、福井でも仙十郎や定一らを中心に国会開設請願運動が展開されていました。そのため、仙十郎は毛受達にも運動への参加を求めていたようです。

この書状において、毛受達は仙十郎に対して運動への参加を拒否しています。その理由として、士族は平民などと違い、自分で起業して生計を立てることが第一であることを挙げています。そのため、運動に参加する余裕はないとしています。

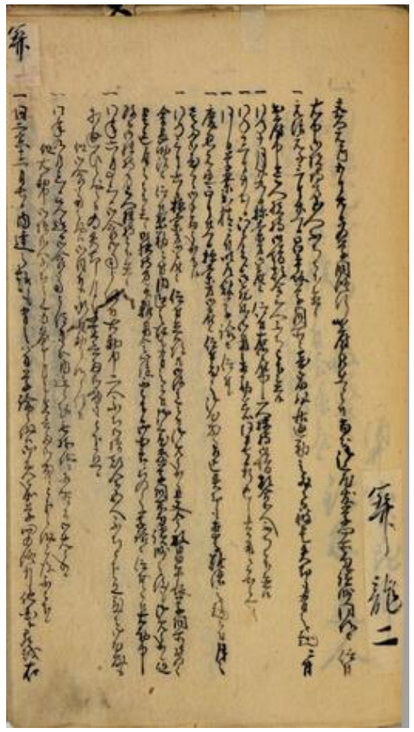
4 海援隊出身の能吏 関（せき） 義臣（よしおみ）

関義臣（1840-1918）
（『明治肖像録』国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

関義臣（旧名山本竜次郎）は、府中本多家の家臣、山本五左衛門の次男です。1855 年（安政 2）、藩校明道館へ入学。藩の顧問格として来福した横井小楠の教えを受けました。61 年（文久 1）故郷を離れ他国へ巡学し、各地の有識者と交流しました。62 年（文久 2）年、昌平坂学問所に入学、翌年藩命により国事探索方に任命されています。その後、東北蝦夷視察を経て長崎に赴き、坂本龍馬らと海援隊結成に従事しています。後の関の回想によると、龍馬は関の意見書に目を通して「北陸ノ奇男児カト、吾論ト同一ニ出ントハ…」（北陸の奇男児ではないか、わが論と同じである）と喜んだそうです。

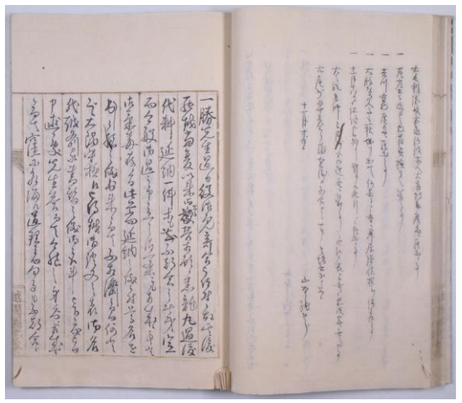
1866 年（慶応 2）7 月、欧州諸国の実情視察のため、長崎から密出国するも台風のため失敗しています。このとき藩や本多家に迷惑をかけることを恐れ、関竜二と改名しました。

維新後、大阪府権判事、さらに営繕局長に抜擢、しかし 70 年（明治 3）武生騒動に連座し、入獄。72 年（明治 5）鳥取県権参事を皮切りに官僚としてのキャリアを積み重ね、99 年（明治 32）には山形県知事に任命され、奥羽鉄道の敷設に尽力しました。1907 年（明治 40）長年の功績により男爵となりました。陪臣出身としては福井県初でした。



関 義臣の履歴

年未詳「元陪臣　坤」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-01039



探索方 山本竜次郎（関義臣）

関が探索方として活動していた 1864 年（元治 1）11 月から翌年 3 月までの記録です。勝海舟の元を訪れて、先に幕府に売り渡した福井藩の蒸気船黒龍丸の売渡金をめぐって、勝に余計な疑惑がかからないよう相談したことや龍馬が福井藩から借りた海軍塾建設資金 1000 両の残金と考えられる 500 両についても記されています。

1864 年（元治 1）11 月～1865 年（慶応 1）3 月「風説書（竜次郎差出ス）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00553

5 近代度量衡の標準器械を製作 大野（おおの） 規周（のりちか）

大野規周は、江戸神田松枝町の幕府暦局御用時計師の家に生まれた幕末明治期を代表する**精密器械技術者**です。祖父と父は伊能忠敬の測量器具を作製したことでも有名です。

1855 年（安政 2）、松平慶永に招かれ器械や銃の製造と教育に当たりました。測量器具に関して橋本左内から規周に宛てた注文のメモが残されており、規周の器具は藩校明道館でも利用されたようです。その後、62 年（文久 2）、幕府の命により榎本武揚らと共に測量器械類の製造習得の職方（技術担当）として**オランダに留学**、67 年（慶応 3）帰国しました。

大野規周（1820-86）
（造幣局提供）

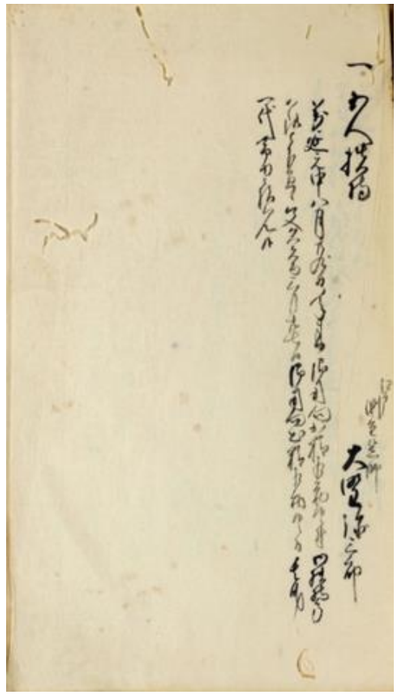
規周作製の大時計（右）と天秤（左）

度量衡の整備は近代化を目指す新政府にとって急務の課題でした。いち早く行動したのが慶永であり、1868 年（明治 1）4 月 2 日に国による秤・升・尺度の統一を目的とした度量衡制度の建白を行っています。

大野は生涯で 50 あまりの天秤をはじめ、多く器械を製作し度量衡整備を具現化した人物ですが、それは旧主である慶永の影響も少なからず受けていたと考えられます。

（造幣局蔵）

維新後、新政府に出仕し**造幣寮（のち造幣局）の技師**となり、銅細工場で主として天秤などの製作とその指導にあたりました。尺度・分銅・目盛器械・温度計・分度器などの**近代度量衡の標準器械を製作**し、その技術の高さはお雇い外国人をも驚愕させました。



大野 規周の履歴

年未詳「諸役人并町在御扶持人姓名　（十二）御国町方」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-01007

大野規周から慶永への献上品　ノギス（左）、象限儀（中）、銀瓶（右）

大野規周は、1855 年（安政 2）慶永に招かれ福井藩に仕えました。規周から慶永に①ノギス…物差し、②象限儀…土地の高低を測る器具、③銀瓶といった品々が献上されました。『景岳全集』には左内から規周への測量器具に関するメモが残されており、規周作製の測量器具は藩校明道館でも活用されたようです。

（福井市春嶽公記念文庫蔵）

6 ドイツ医学を指向した天皇の侍医 岩佐（いわさ） 純（じゅん）

秦佐八郎、北里柴三郎、志賀潔…など、明治の日本の医学生の多くは、ドイツに留学し後に近代医学のパイオニアとなりました。このドイツを模範とした近代医学の潮流を築いたのが岩佐純（通称は玄珪）です。

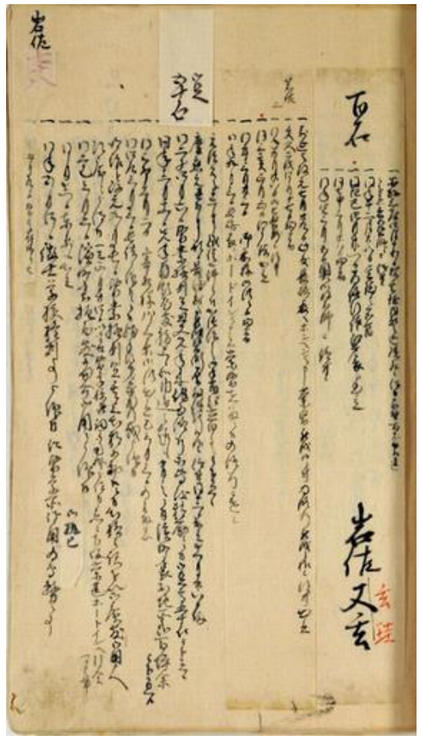
岩左純（1836-1912）
（『稿本福井市史』1941 年より転載）

岩佐は、1836 年（天保 7）福井藩侍医の子として福井城下三上町（現、福井市宝永）に生まれました。はじめ藩の医学校に学び、その後、慶永が江戸から招いていた坪井信良から西洋医学を学んでいます。その後、江戸にて坪井芳州、下総佐倉にて佐藤尚中、長崎に遊学し蘭医ポンペ、ボードウィンのもとで学んでいます。1867 年（慶応 3）には慶永に従って在洛中に孝明天皇を診療しています。

1869 年（明治 2）西洋医学普及のため医学校設立の建言を行い、取り入れられて医学校取調御用懸りとなりました。その時に相良知安とともにドイツ医学の採用を強く主張しました。その結果、ドイツから多くの医師が顧問として招かれ、また多くの日本の医学生がドイツで学ぶこととなります。

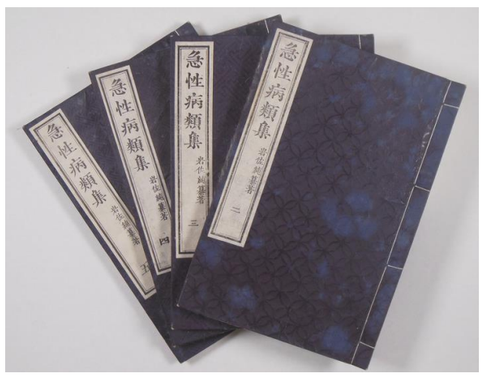
岩佐は、大学少丞・大学大丞・文部大丞・文部中教授などを歴任し、1872 年（明治 5）以後、明治天皇の侍医も務めました。

藩士たちの足跡



岩佐 純の履歴

年未詳「士族一（イ、ハ、ニ）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00485



ドイツ医学への指向

資料は岩佐が 1873 年（明治 6）に刊行した医学書です。序文では「疾病ヲ概論シテ之ヲ大別スレハ只急慢ノ二性ニ過サル…」と述べ、急性の諸病（緊急性の高い病気）への対応を訴えています。ドイツ医学の権威であったニーマイルの内科書を抄訳し、同時にその他ドイツ医学の碩学ともいうべき人々の新説も掲載しています。

1873 年（明治 6）『急性病類集』（福井県立歴史博物館蔵）

7 武生出身の初代福井県会議長 本多（ほんだ） 鼎介（ていすけ）

本多鼎介（1839-98）
（『福井県議会史』第１巻
1971 年より転載）

本多鼎介は福井藩家老で府中（武生）領主の本多家の家臣の家に生まれました。府中の藩校立教館で教鞭をとり、後に側用人や町奉行を務めました。

1881 年（明治 14）最初の福井県会議員選挙で当選し、初代議長となりました。

鼎介は明治時代の福井県の地理や産物に博学で、しかも文筆に優れていたといいます。そのため、自ら『福井県管内地誌略』『越前地誌略』などの教科書を編さんして、福井県の教育指導にあたりました。

1882 年（明治 15）の県会議員

資料は通常県会の閉会式後に撮影された県会議員の集合写真です。県令石黒務と議長本多鼎介の姿が確認できます。鼎介と務、官員と思われる人物以外は羽織袴です。

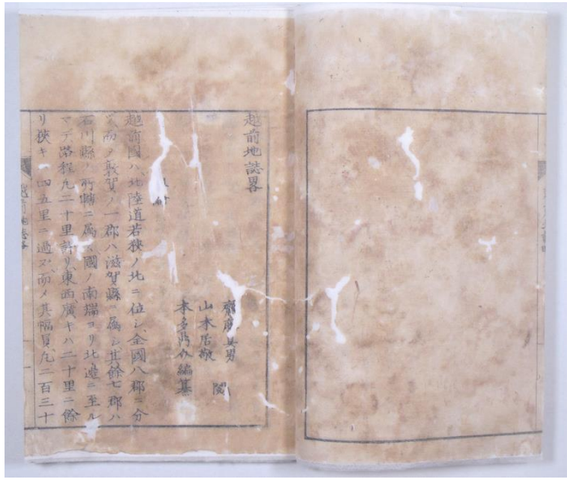
武家出身の議員は鼎介だけで、他の多くの議員は庄屋の名望家でした。また、ちょんまげを記念に残していた議員もいたようです。

（『福井県議会史』第１巻 1971 年より転載）

鼎介の墓には「天資剛毅ニシテ勤勉、識見常ニ俗流ニ卓越セリ、本多家ノ今日アル、実ニ先考ノ余恩ト謂フベシ」と刻まれています。

本多 鼎介の履歴

年未詳「士族二（ホ、ト、チ、ヲ、ワ）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00486



福井オリジナルの教科書

資料は本多鼎介が編さんした教科書『越前地誌略』です。石川県の文明堂と開智堂によって 1876 年（明治 9）に出版されました。

当時は教科書検定制度がなく、教科書は各地方で自由に独自なかたちで発行されていました。

この教科書は下等小学校五級生（8～9 歳の子）を対象としたもので、初めて地誌を学習する子ども向けの内容となっています。

鼎介によれば、この教科書では著名な山・川・村・市などを挙げて平易な文章で説明しているとのことです。ただし、詳細が書かれていないところや分かりにくいところもあり、各校の教師に対して内容を精選して適宜指導するよう求めています。

1876 年（明治 9）10 月 12 日「越前地誌略（教科書）」
橋本伝右衛門家文書（当館蔵）　A0163-00111

8 “羽二重王国”の下地を築いた 山岡（やまおか） 次郎（じろう）

福井県の輸出向け羽二重織物のはじまりは、1887 年（明治 20）に福井織工会社で開かれた講習会といわれています。この講習会を指導したのは、先進地桐生の機業家森山芳平のもとでに製織技術を学んだ技術者です。

そして、この桐生産地からの技術移転を仲介したのが、山岡次郎でした。山岡は福井藩から命じられてアメリカに留学。帰国後、東京大学理学部で化学を教え、農商務省発足にともなって、御用掛や技術官を務めました。

山岡は、製織・染色の指導を通して桐生・足利、伊勢崎、八王子、京都などの産地と深くかかわり、「染織界の一元勲」と呼ばれました。

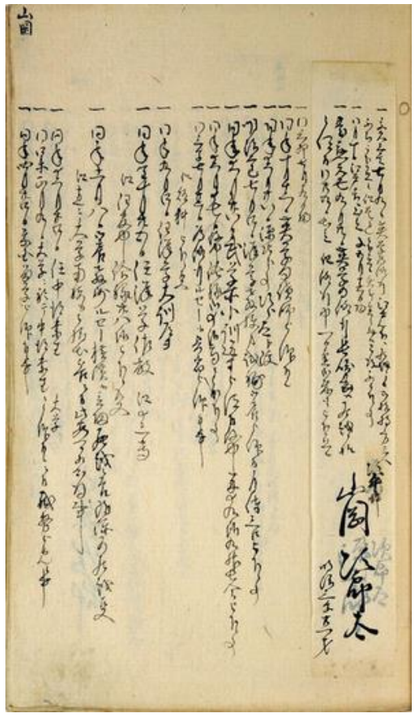
山岡次郎（1850-1905）
（プリンストン大学蔵）

森山芳平の日記「徴忘録」

森山芳平（桐生）の日記には、たびたび山岡次郎が登場します。そして、その山岡を介して福井から村野文次郎が森山を訪ねたのは、1885 年（明治 18）11 月。「野村（村野）文次郎君来ル、氏ハ山岡先生ノ門弟ナリ」「氏ノ如キ実力家ハ未嘗テ見ザル也」(11 月 12 日)と、森山は、村野の技術者としての力量を見抜き、すぐに意気投合したようすが記されています。

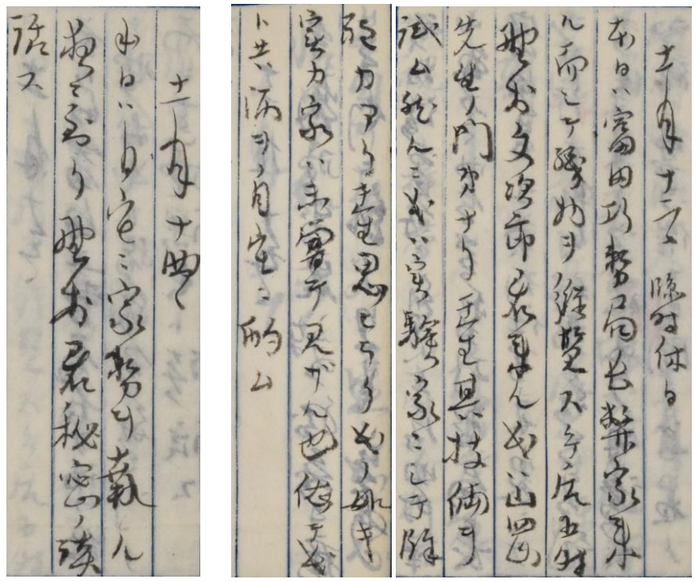
（個人蔵、群馬県立歴史博物館提供）

藩士たちの足跡



山岡 次郎の履歴

年未詳「士族五（ヤ、マ、ケ、フ、コ、エ、テ、ア）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00488



現代語訳

（明治十八年）

十一月十二日　臨時休日

本日は富田工務局長（富田命保、農商務省）が弊家へ来る。そして織物を縦覧する。午後五時、野村（村野）文次郎君来る。氏は山岡先生の門弟だ。わたしはその技量を試してみた。すると氏は実験家であり、よほどの力ありと思った。氏のような実力家はいまだかつて見たことがない。よって氏とともに酒を自宅で酌む。

（中　略）

十一月十四日

本日は自宅で家務を執る。夜になってから野村君と秘密の談話をする。

9 龍馬と由利を知る初代宮城県知事 松平（まつだいら） 正直（まさなお）

松平正直は福井藩士松平正泰の子です。1858 年（安政 5）に家督を相続し、64 年（元治 1）に大番頭になりました。67 年（慶応 3）、坂本龍馬が福井を訪れ、三岡八郎（後の由利公正）と面談した際には正直と出淵伝之丞が立ち会いました。

1869 年（明治 2）に少参事、70 年（明治 3）に民部省出仕、73 年に内務少丞、77 年に内務権大書記官となりました。78 年に宮城県権令、同県令を経て、86 年（明治 19）に同県初代知事に就任しました。

松平正直（1844-1915）
（『太陽』第 5 巻第 1 号
1899 年より転載）

松平 正直の履歴

年未詳「士族五（ヤ、マ、ケ、フ、コ、エ、テ、ア）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00488

古備前友成（こびぜんともなり）
古備前正恒（こびぜんまさつね）
備前一文字（びぜんいちもんじ）
宗吉（むねよし）
備中古青江康次（びっちゅうこあおえやすつぐ）
来国行（らいくにゆき）
相州行光（そうしゅうゆきみつ）
備前一文字信房（びぜんいちもんじのぶふさ）

（『名士の嗜好』（中央新聞社編　1900 年（明治 33）　文武堂）より作成）

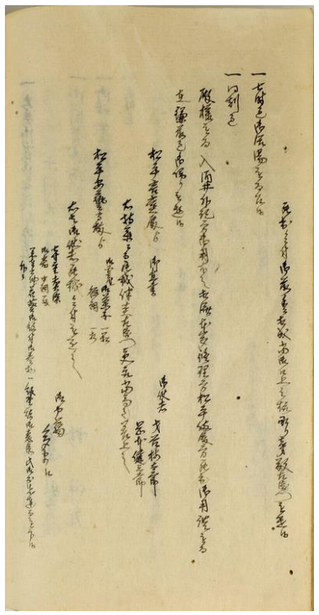
刀剣マニア正直

中央新聞社が著名人への聞き書きをまとめた『名士の嗜好』によれば、正直には刀剣マニアの一面もあったようです。

正直が刀剣を好きになったのは、福井藩の御用人であった稲垣治部（じぶ）から刀剣の講釈を聞いたことがきっかけです。また、福井藩の権大参事であった小笠原幹（こわし）からも刀剣の話を聞いています。

左に示したのは、1900 年（明治 33）当時、正直が所持していた主な刀剣です。いずれも著名な刀工の作品です。

正直はその後熊本県知事や内務次官、貴族院議員や枢密院顧問官に就任し、1900 年（明治 33）には男爵となり、華族に列せられました。



龍馬最後の 28 日

資料は側向頭取が記した日記です。松平慶永の日常の詳細が記録されており、慶永と様々な人物との交流が分かる貴重な資料です。

側向頭取とは手元費用の管理や小姓頭取・小姓などを監督した要職です。

1867 年（慶応 3）10 月 28 日、坂本龍馬（才谷梅太郎）と岡本健三郎が山内容堂(豊信）の手紙を届けに福井を訪れています。残念ながら、この時龍馬は慶永に面会できませんでした。

龍馬は同月 30 日朝から三岡八郎（由利公正）と会い、夜中まで新政府の経済政策について話し合ったとされています。この時、八郎には松平源太郎（正直）が同行していました。

1867 年（慶応 3）8 月～12 月「御側向頭取御用日記（15）」
松平文庫　（福井県立図書館保管）　A0143-00525

10 学者！技術者‼教育者‼‼ 市川（いちかわ） 兼恭（かねのり）

市川兼恭（1818-99）
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

広島藩の藩医の三男として生まれ、大坂で緒方洪庵に、江戸で杉田成卿（せいけい）（玄白の孫）に学び、幕府の下で天文方和解御用、蕃所調所（しらべしょ）（洋学研究教育機関）教授手伝、開成所教授、大番格砲兵差図役頭取勤方を、維新後も明治政府の下で京都兵学校教授、大阪兵学寮教授を務め、東京学士会院が創設されれば、その初代会員（全 21 名）に選出される、そんな指折りの人物、市川兼恭。

実は、はじめての出仕先は福井藩でした。

兼恭は 1851 年（嘉永 3）11 月に一代限りで召し抱えられ、蘭学方として翻訳御用などに携わってます。54 年 9 月には扶持を加増されて一代限りも免除されますが、翌 10 月には幕府の老中首座阿部正弘から天文方の蕃書和解御用を命ぜられ、以後、幕府と明治政府の役職を歴任していくことになります。

兼恭が幕府に召し抱えられたのは、御用を命ぜられてから約 11 年後の 1865 年（元治 2）のことでした。それまでは福井藩から扶持が下されており、福井で江戸で、研究に開発に教育に奔走していました。

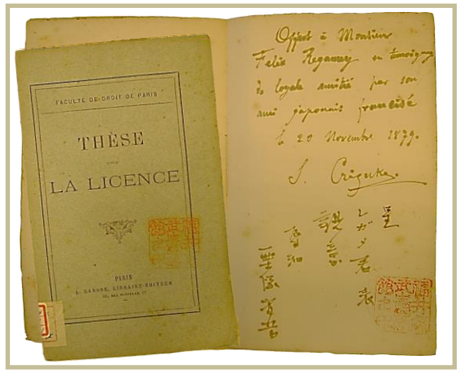
「“越前福井県人” 市川斎宮」
左上と同じく福井市立郷土歴史博物館福井市春嶽公記念文庫「松平春嶽愛蔵の写真帖」の中にある兼恭の別の写真です（斎宮は通称）。こちらは裏に“越前福井県人”という書き入みが。兼恭は松平家にとっても自慢の家臣だったのかもしれません。
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

11 「日本近代法の“子”」 栗塚（くりづか） 省吾（せいご）

栗塚省吾（1853-1920）
（『新選代議士列伝』国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

福井藩の陪臣（府中（武生、現在の越前市）領主・筆頭家老本多家の江戸詰家臣）の長男として江戸で生まれました。漢学ついで英学さらに仏学を修め、開成学校に入学、続けて大学南校（開成学校の後身）、司法省明法寮（めいほうりょう）で学び、さらに同省法学校（明法寮の後身）正則科第 1 期生となり、そこで「日本近代法の父」ボアソナードらからフランス法を学びました。そしてパリ大学へ留学、そこで法学士号を取得します。

フランスから帰国した栗塚は、はじめ母校法学校で速成科（短期養成）第 2 期生の講義を担当しました。退任後は、司法省で官職や委員を歴任し、この間に民法典（旧民法）の編纂にも従事しています。それから十数年後の 1898 年（明治 31）、栗塚は 46 歳で大審院（当時の最高裁判所）の部長を最後に官職を離れ、弁護士として独立開業します。そして 1902 年（明治 35）には衆議院議員に当選し、それから 3 期にわたって議員を務めました。



THESE POUR LA LICENCE
越前市中央図書館栗塚文庫の中に栗塚のパリ大学法学部の卒業論文があります（全 8 点）。モガミ氏へ。ペリエ夫人へ。フェリックス・レガメ君へ。渡しそびれたのか書き直したのか、献辞が書かれたものも。
（越前市立図書館（中央図書館）蔵）

『天皇の料理番』で秋山篤蔵の兄周太郎の指導者として登場し、篤蔵を華族会館に紹介する「桐塚先生」（桐塚尚吾）。そのモデルがこの人、〝栗〟塚〝省〟吾です。

12

春嶽・勇姫に仕え、士族となった3人の女性 歌島（うたしま）・磯岡（いそおか）・山沢（やまさわ）

福井藩士現役当主の履歴が記録された「士族」には、**例外的に3人の女性が登場**します。

ともに春嶽の大奥侍女の筆頭「年寄」を務めた**歌島**（土居延寿、?-1871）、**磯岡**（北村養寿、生没年不明）、**山沢**（山沢静寿、?-1885）です。その功労を賞して、いずれも1869年（明治2）に養子をとって一家を興し、士族となりました。

このうち**歌島**は、春嶽の出生時から田安家に仕え、福井藩主となった翌年（1839年）には、歌島を名乗って「年寄」となっています（「少傅日録抄」松平文庫　福井県立図書館保管）。

これに対して**磯岡**と**山沢**は、中根雪江が「女丈夫といふへき男コ魂の気慨あり」（磯岡）、「淑静堅貞にして婦徳あり」（山沢）と評し、「時事の艱難（かんなん）に際し、事によりてハ諫諍（かんそう）をも申上げたり」と回想していることから、大奥にあって時には**面と向かって春嶽をいさめることもあった**ようです（『奉答紀事』松平文庫　福井県立図書館保管）。

とくに勇姫との婚礼の翌年（1850年）には、従来からの木綿・紬の着用が改めて大奥にも申し渡されたこともあって、勇姫附の女中たちの中には「御里方（細川家）へ**讒間（ざんかん）（告げ口）**を入れ、庚戌（かのえいぬ）（嘉永3）御在国の御留守中、しはし御**混雑（もめごと）**」があったようです（『奉答紀事』）。

こうした中で1854年（安政1）の大奥人員削減のために、**磯岡**はいったん隠居・退役し、その後「養寿」と改名して再び出仕しました。

勇姫（1834-87）
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

大奥の女性たち（イメージ）

歌島（延寿）と山沢（静寿）の印影
（1870年）
「大奥女中分限帳」松平文庫
（福井県立図書館保管）　A0143-01332

福井城三ノ丸の春嶽大奥（福井城三ノ丸、1863年）
□部分。　「越前国御座所三ノ丸御屋形ノ図」松平文庫　（福井県立図書館保管）
A0143-21380